学園創立四十周年記念式典
厳粛且つ盛大に挙行
十月一日

昭和八年、酪農学園の母体である酪農義塾が創設されて以来、本年で四十周年を迎え、創立記念式典が去る十月一日午前十時より学園礼拝堂において教職員参加のもとに厳粛に行なわれ又同日午後二時より札幌パークホテルにおいて本学園の教育にご理解深い方々三百余名のご臨席をいただき、式典並びに祝賀パーティーが盛大に挙行された。

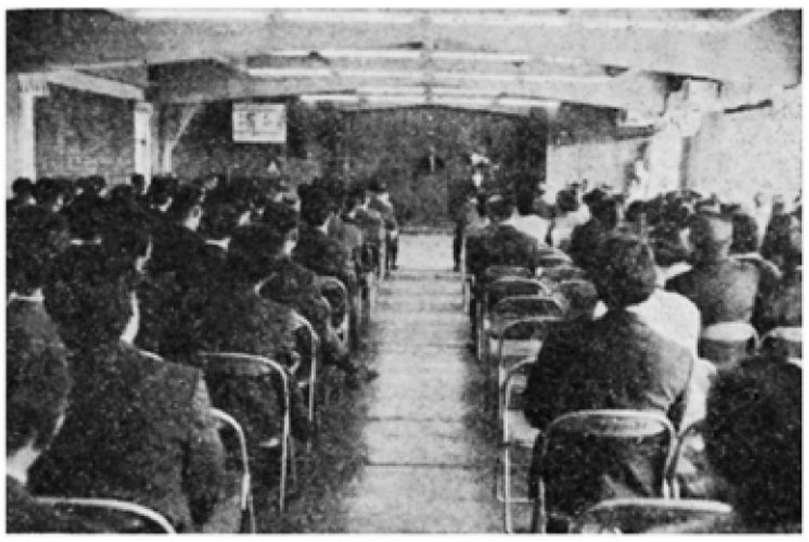
記念式典次第（午前10.00）

1．前　　奏（黙禱）
2．讃 美 歌　312番
3．聖書朗読
4．祈　　禱
5．式　　辞　理事長
6．園長先生に感謝の記念品贈呈
7．永年勤続者表彰
8．園長挨拶
9．酪農讃歌
10．後　　奏

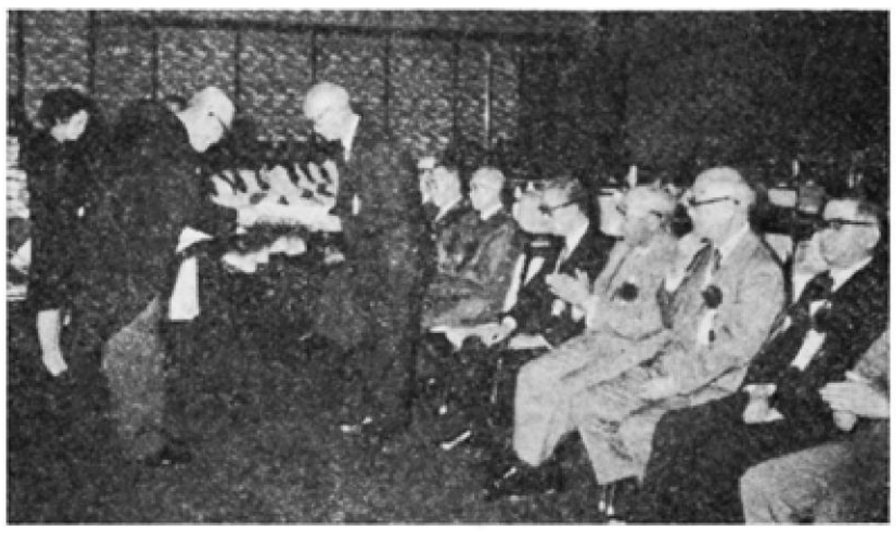
記念式典次第（午後 2.00）

1．前　　奏（黙禱）
2．讃 美 歌　312番
3．聖書朗読
4．祈　　禱
5．式　　辞　理事長
6．学園功労者に感謝状贈呈
7．酪農讃歌　三愛女子高校聖歌隊
8．園長挨拶
9．祝　　辞（並に祝電披露）
10．後　　奏
11．祝 賀 会

▲学園教育に理解深い方々 300 余名のご臨席のもとに挙行された記念式典——札幌パークホテル

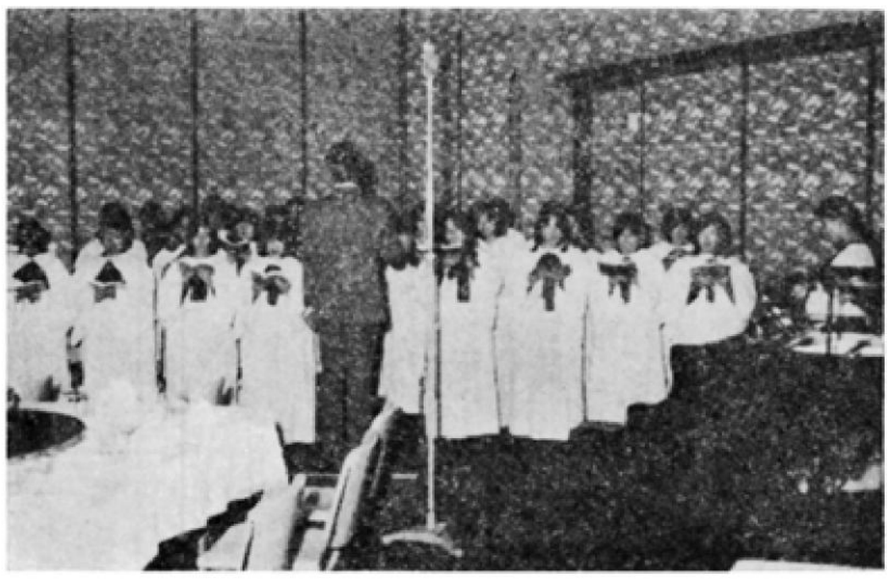


▲学園礼拝堂において厳粛に挙行された記念式典

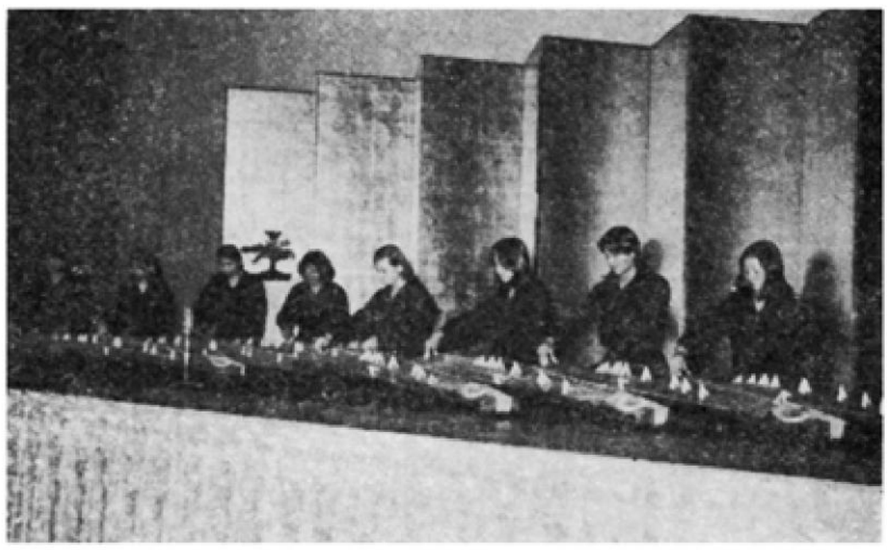


▲学園の発展にご尽力された方々へ佐藤理事長より感謝状並に記念品贈呈——札幌パークホテル

▲永年勤続功労のあった教職員に対し、佐藤理事長より表彰状並に記念品贈呈——学園礼拝堂



◀記念式典における三愛女子高校聖歌隊の合唱



◀式典を祝う三愛女子高校生の箏曲

◀創立四十周年を祝して乾杯——札幌パークホテル

酪農学園だより
第12号
酪農学園発行
北海道江別市西野幌582
発行者　編集委員会
印刷所　北海道リハビリー

特集
酪農学園創立
四十周年記念

記念式典における
黒沢園長の教職員に対する挨拶

◀挨拶する黒沢園長

只今理事長から職員ご一同の真心こめた記念品を頂戴いたしました、誠に感激している次第であります。先程の佐藤理事長の式辞のなかで、この学園の成り立ち、建学の精神について縷々述べられ、又表彰者を代表して謝辞を述べられた中曾根先生のその当時のお話を承わって、全くその通りであって私は深く感謝をいたす次第であります。

この学園の前身は酪農義塾でありますが、義塾をつくるとき、私の酪農の恩師である宇都宮先生は、教育事業というものは容易な業ではないと忠告され、福沢諭吉先生にしても、その他教育に携わった人々は大変な苦労をされたものだ、君の酪農教育をやるという趣旨はまことに結構であるが余程考えなければなりませんよ—、私は余り賛成することはできないし、ということであった。

宇都宮先生は酪農教育には反対ではなく、成し遂げるには非常な努力と決意が必要であり、その覚悟がなくては駄目であるという忠告なのであります。

私は水戸の出身でありますが、実は私の村から四キロ位離れたところに水戸黄門の西山荘というのが今なお昔のままで残っております。今では私の生地と同じ大田市になっております。

私は子供のときから「知行合一」ということを厳しく教育された、これは水戸学の真髄であります。知るだけでは駄目だ—行なわなければ何の役にも立たない、即ち知行合一の教育を子供のときから受けてきた私には、どんな困難があっても酪農教育をやらなければならないという決意をして、折角の宇都宮恩師の忠告を退ぞけ、酪農義塾を創立したのであります。その相談相手は理事長の厳父佐藤善七氏で私よりは一〇才位年長でしたが、同氏と内々に義塾創設の相談をしておりましたので、宇都宮恩師の忠告があっても、その実現を図ろうということで佐藤善七氏に励まされ、又励ましあって酪農義塾をつくり、今日の学園の始まりとなったのであります。宇都宮恩師の忠告を退ぞけて創めたのでありますから苦労は覚悟しておりました、けれども同志諸君の多くの協力をいただいたことに私は感謝にたえません。既に故人になられた方も沢山おられます、誠に残念でありますがこれら故人の方々に対し又学園を去られた方に対しても私は深くお礼を申し上げたいと思います。ゆわんや皆さんにおいては最初からの方もおれば、その後学園のために二〇年、三〇年或は四〇年という長い間学園の理想実現のために着々と努力くださいましたが、只今理事長からお話のあったように、尚改善すべきものは施設を含めて沢山あると思います。これらは理事長のご英断、ご努力にお願い申し上げる訳ですが同時に皆さんに対しても、私は酪農畜産は日本の国土を守り国民の健康を守っていく基礎であることを確信しておりますから、皆さんにおいても、こうした信念のもとに益々ご努力をお願いいたします。

私は数え年で、あと三ケ月で九〇才になります。よくも生たものだな—と自分でも感心いたしますが、まだ九〇才になった気持は全くなく若いような気持でおります。然し肉体は許しません、実は今少々健康を害しておりますのでこれから又病院にまいりますが、私はこの学園が理事長の云われるように、本当に理想に燃えた日本を救う国民を育て、日本国土を救うところの大本山にしたいのが私の祈りであります。どうか皆さん、私の意のあるところをお願いします皆さんのご健康を特に祈ってご挨拶といたします。ありがとうございました。

（録音テープより　文責　勝目）

創立四十周年を迎えて

酪農学園理事長　佐藤　貢

酪農学園はその前身である酪農義塾が創立されてから本年で満四十周年を迎える事になるが、月日のたつのが早いのに驚くと共に、その大きな変化にも感嘆せざるを得ない。

当学園発展の歴史を辿り、今日まで果してきた使命を回顧するに際し、酪農義塾がいつ、誰によって、また何の為に設立されたかに就て詳述する事は、当学園存立の理由と、開設以来創立者が苦難を乗り越えて払ってきた努力と、その情熱が何の為であったかを理解してもらう上に極めて大切な事と思うので、敢て冒頭に之を記載する次第である。

義塾は昭和八年十月一日に開講されたが、これは北海道製酪販売組合連合会（酪連）によって始められたのである。

この酪連はそもそもいつ、どうして、何の為に、誰によって設立されたのかと云う事も、義塾設立の動機と必要性を理解してもらう上に重要と考えるので先ずこの点にも触れてみたい。

酪連創立の動機は大正十二年の関東大震災である。東京横浜が壊滅状態に陥入り、住民は塗炭の苦しみに遭い、生活は極度に困窮した。之を救済する為各国からは多くの救恤品が贈られたが、一方政府は消費者価格を下げる為これら物資の輸入関税を撤廃した。バターや煉乳もその対象になった。この打撃を受けたのが煉乳会社で、国産品の大幅の値下げを余儀なくされ、また外国品に販路を奪われ窮地に陥入った。

そこで会社は乳価を値下げし受入れ乳量の制限を断行した。その結果酪農民は一大打撃を受け、その打解策に狂奔し、政府並びに煉乳会社に陳情を重ねたがその努力は空しく、遂に窮余の策として宇都宮仙太郎、黒沢酉蔵、佐藤善七、深沢吉平氏等酪農の先覚者が提唱した製酪組合は、五五回に亘る酪農民の協議を経て、漸やく六三〇余名の同志の結束で設立された。

これが酪連で、農民による農民の為の、自から生産した物を共同の力によって処理し、加工し販売する製酪販売組合として大正十四年五、四五〇円の出資金で設立されたのである。而しその前途はどうなるのか誰も予測は出来なかったが、それ以外に道はなかったのである。

▲式典で挨拶する佐藤理事長

当時道内の多くの町村には僅か三―四戸の酪農家よりいない状態で、所謂酪農の黎明期とも云うべき姿で、酪農と云う言葉さえ一般の人々には理解されない時代であった。従って酪連の経営も苦難を重ねた。更に昭和六―七年の世界的経済恐慌の波と道内の冷害凶作の二重苦に遭遇して再度酪農の危機を迎え、煉乳会社の牛乳受入れ制限、工場閉鎖が相次ぎ、本道の酪農史上前例のない大混乱を招いた。

而し此の危局も酪連が全道の牛乳を受け入れ、煉乳会社に必要乳量を供給すると云う原料乳の統制契約と、煉乳会社はバターの製造販売をやめ、煉乳製造に専念する、酪連は煉乳製造を行なわずバターに専念すると云う分業制度の確立によって解決され、本道の酪農界も混乱から平静に立ち戻った。之が昭和八年である。

そこで酪連がこの牛乳統制を機会に、幼稚な酪農を振興しその安定を図る為に何を為すべきかを真剣に検討した結果、理事会に於て得られた結論が酪農教育の問題である。

困難ではあるが、酪農教育を進める事こそ、酪農振興の最大の課題であり、それ以外に途はない。而も当時に於ては酪農教育の機関は、わが国には何も無い時であったから、酪連自から之を実施する以外に手段がなかったのである。

こうした理由から酪農義塾の名のもとに酪連に塾舎が建てられ、当時専務理事であった黒沢園長が塾長となり、酪連職員教育の為の製酪科と、酪農家の子弟教育の為の酪農科とを設け、全寮制で実学主義の教育が始まったのである。尚この義塾開講に際して、当時畜産連合会に永年勤務していた青山永氏を義塾の主事として迎え、講師は二―三名を外部に委嘱した以外は全部酪連の職員が之に当ったのである。

この塾の全寮教育は小・中卒も大学卒も区別なく一定期間夫々一クラスで同じ教育をし、而も起床から就寝に至るまで極めて厳格な生活訓練と、学科と実習とを組み合わせたカリキュラムによる実学教育であった。此の点は過去のわが国に於ける教育に於て、兎角実習実験が軽視されてきた大きな欠陥を是正し、単に理論だけでなく、学んだ事を身につけさせ、実社会に出て直ちに実務に役立つ人間を作る為の教育を確立しようとしたものである。その後酪連が、上野幌の出納農場を譲り受けてからは、酪農科の教育は心ゆくまで其処で行なわれたのである。

此の義塾教育は昭和十六年まで続けられたが、この塾卒業生は全道各地に於て、其の地域の酪農推進の中心的役割を果し今日迄指導者として活躍し、その全部の人々が成功してると云ってよい。又製酪科の出身者は酪連時代から、興農公社、北海道酪農協同㈱、雪印乳業、クロバー乳業、雪印食品、種苗その他の関連会社の重鎮として、今日の発展に偉大な貢献をしている。

即ち酪農義塾は、酪連創立の目的である酪農振興を果す為の原動力となった立派な酪農人を作り上げ、酪農民の生活と経済力を豊かにし、社会的地位を高める上に絶大な成果を齎したものと云える。

更に戦争酣（たけなわ）ならんとする際、酪連は北方農業確立の為、義塾を発展的に解消して学校法人とする意図のもとに、現在の野幌の地に広大な農地の入手に着手したが、偶々昭和十六年、道内の全乳業会社と酪連が大合同を断行して北海道興農公社を設立する事となったので、酪連は北方農業確立基金を設定した外、寄附金を以て学校設立に充当する方策を樹立し、之を基にして、興農公社に移行後の昭和十七年、財団法人興農義塾野幌機農学校として甲種農学校の設立認可を受け、同年六月十八日新校舎と十五の部落農場に全寮制の寮舎を建設して開校したものである。これが当酪農学園の創まりである。

而し開校当時は環境の整備が不充分で、重粘土地帯の為道路は泥濘を極め、その上水量不足で風呂水にも事欠き、遠方の農家から馬車で貰い水をする状態が、も続き、先生や生徒の苦労は全く言語に絶するものがあった。

従って汗と泥にまみれた寮生は三日に一度の入浴が出来れば良い方であったが、将来に希望と夢を抱いた若人たちは、卒先躬行の野喜一郎先生等に励まされて之を物ともせず、所謂流汗悟道の精神に徹して学業にいそしんだのである。

而しこうした苦労が不撓不屈の魂を養ない、本道に理想の酪農郷を築こうとする情熱に燃えた酪農人を作り上げたのである。だが昭和二十年の第二次大戦における敗戦の結果は、わが国民を虚脱状態にし、食糧を始め物資不足と相まって物心両面の一大混乱を巻き起し、国の前途に暗澹たる影を投ずるに至った。

こうした現象は当学園内部にも波及する虞（おそ）れなきにしもあらずと云う様相を現わした。玆に於て黒沢園長はいたく之を憂い、デンマークがドイツとの戦いに敗れ、人心が荒廃し国土は疲弊し亡国状態に陥入った際、老牧師グルンドヴイやダルガス等愛国の志士が立ち上り、外に失なったものを内に求めよと叫び、全国に国民高等学校を設立し、キリスト教の精神によって人心の興隆を企図し、神を愛し、人を愛し、土を愛せよと国民に訴え、この三愛精神によってデンマークを復興し、鉄も石炭もない国が数十年にして世界に冠たる酪農王国となり、食糧は有り余って海外に輸出し、諸工業は栄え、平和で豊かな理想郷が出現した歴史を想起し、これと似た状態のわが国民を救う道はこれ以外にないと考え、札幌教会の白戸老牧師や私の父佐藤善七と協議し熟慮の結果、酪農学園に短大を設置し、之を契機としてキリスト教精神による教育を行ない、先ず農村を健全なものにしようと決意してこの方針に踏み切られたのである。

それ迄は農民道を鼓吹し、報徳を説き、天地の経論に従って北方農業を振興し、人間形成を通じて明るく豊かな農村社会を作る為に懸命の努力を払われたのであるが、元々黒沢園長は青年時代にキリスト教に入り、酪連の創設並びに学園の設立共にキリスト教の同志が中心となって始めたのであるから、当初から教育にも之を取り入れたい意図が多分にあった事は私も之を良く知っているが、キリスト教に対する理解の少ない時代に於て学園が之を教育の柱とする事が、酪農教育そのものが急務である際に果してプラスになるかどうかと云う点から躊躇されていた事も明らかである。この事は特に酪農教育を進めるに当ってそれにふさわしい教育者を得る事は実際上容易でない事からも理解されるであろう。而し敗戦の結果が黒沢園長に対して決断の大きな楔機となった事は事実である。

かくしてキリスト教に基づく三愛精神が当学園の建学の精神となって今日に至っているが、昭和二三年、学制改革にともない野幌機農学校は機農高校となり、同年通信教育の為の高等酪農学校を開設し、また各種学校としての大学部（二五年短大に改組）を設け、昭和二六年法人名を学校法人酪農学園と改め、昭和三〇年には機農自動車学校を設立して在学中に運転免許の取得を可能にし、更に昭和三三年江別市民の要請に応じて女子高等学校（三五年三愛女子高校と改称）を設立、昭和三五年には更に発展して大学を設立し、漸次酪農学科、農業経済学科、獣医学科を開設して名実共にわが国における唯一の酪農学園として多くの人材を社会に送り出し、全国各地に於て当学園の卒業生が活躍し、多大の貢献をしている事は喜びに堪えない。

又最近に至って各校の同窓会役員が協議の結果、連合同窓会が結成され、その発会式が行なわれた事は、卒業生間の連絡を密にし、親睦を深める上に大きな役割りを果す上からはもとより、学園と同窓会が一体となって今後必要と考えられる種々の重要な計画や対策を達成する上からも極めて緊要な事であり、㌧喜びに堪えないところで、切に今後の活躍を望んでいる。

終りに、学園の将来展望に就ての所見と夢を披瀝してみたい。

七十年代は世界の大きな変革期と云われ、わが国もその例外ではなく、政治、経済、産業、教育、文化、生活の各分野に亘り変革が起りつつあるし、人間の意識、価値観も変りつつある。従って当学園も今後之に対応し得る将来構想を樹立し、それに基づいて着実に計画を進め、以て社会的使命を果さなければならない。此の為には各校共に時代の変化を見極めつつ、また多用化する意識の変化に即応出来る態勢を確立する要がある。

学生生徒の定員数、学科の増設や統廃、修業年限、学課目やカリキュラムの編成並びに教育内容等に就て総点検を行ない、先見的なプロジェクトを早急に確立したいと考えている。

また計画実行に伴なう施設設備に就ては長期的な健全財政計画を立てる必要があり、人件費や物件費の支出は常に経常費の収支が均衡を保つ事を鉄則として周到な予算の編成とその統制が自主的に励行される事が要請される。これ無くしては学園の存立はない点に鑑み、この方針を堅持してゆきたい。資産の処分に就てはその一部を施設の改善拡充に当てるが、残りは将来の財源として大きく役立つ方向に運用を今後とも計ってゆきたい。

次に学園の教育を充実して時代の要求に応え、教職員や学生に夢と希望を与える為に、海外との学問の交流を図りたい。之は昨年カナダ訪問の際、アルバータ州農業省に対する提案が実を結び、酪農関係の教授二名、学生四名、酪農青年十名の相互交流を具体化することになり、北海道日加酪農科学技術交流協会を設立してこの計画を推進することに決定し、その事務所を当学園内におくこととした。

この計画は先般、私がカナダ訪問の際確認され、エドモントンにおける北海道物産展の前夜祭の席上、アルバータ州の副首相兼農業大臣ホーナー博士によって公表された。

本道よりも厳しい気象条件下にあって大規模の優れた省力経営を進めているアルバータ州との人的交流は学問の上でも事業面でも裨益するところが多く、特に今後国際的観点から国内産業経済に就ても検討し対処しなければならぬ問題点が多いから、国際的視野を養なう必要があると信ずるので、この計画を是非成功させたいと念願している。

またカナダ側としても今後の開発を進める上において、日本の有為な学徒による研究を特に期待している。こうした見地から当学園の四十周年を記念する事業として此の問題をとり上げ、更に之を通じて学園発展の大きな力にしたいと念願する次第である。

▶開設当時の自動車学校
（現中央農場事務所付近）

永年功労者の表彰

記念式典にあたり永年勤続功労者に対し、表彰状並に記念品、又学園の発展に永年尽力下さった方々に、感謝状並に記念品が佐藤　貢理事長から贈呈された。

永年勤続表彰者氏名
（敬略称）

◇職員及び役員としての永年勤続者（二名）
酪農学園機農高等学校長　黒沢力太郎
酪農学園事業部長　西本宗信

◇三〇年以上勤続者（五名）
酪農学園短期大学　中曾根徳二
酪農学園自動車学校　石川健一
酪農学園事務局　辻田武作
〃　佐竹静治
〃　本多八郎

◇二〇年以上勤続者（二四名）
酪農学園大学　高杉成道
〃　村上美枝
〃　遊佐孝五
〃　松井幸夫
〃　牛島純一
〃　五十嵐光
〃　原田勇
〃　五十嵐涼二
酪農学園短期大学　清水次子
〃　土橋慶吉
〃　市川舜
酪農学園機農高等学校　五十嵐令七
五十嵐厳
大沢二郎　樺沢茂男
本田たま　横山貞子
井上錦次　平岡竜一
三愛女子高等学校　尾崎為治郎
酪農学園短期大学酪農学校　石亀繁太郎
酪農学園元野幌農場　中島誠
酪農学園事務局　種田三郎
杉本亥之助

感謝状贈呈者御芳名
（敬称略）イロハ順

◇酪農義塾創設以来役員及び評議員としての永年功労者
瀬尾俊三

◇顧問及び役員としての永年功労者
高橋雄之助　町村金五
松原太郎　樋浦誠

◇顧問及び役員並びに教育職員としての永年功労者
黒沢亮助　出納陽一

◇顧問及び評議員としての永年功労者
高田富与　武田清平

◇役員及び評議員としての永年功労者
大川義男　川村秀雄
高橋節郎　児玉由一
安達勇　沢潤一
三井武光　三田村健太郎

◇役員としての永年功労者
石畑久成　原田正男
二瓶栄吾　築山泰蔵

◇評議員としての永年功労者
五十嵐清　太田正治
川村勉　吉田千里
高倉勝孝　土谷長松
山本庸一　山田為吉
山本博　山岸六郎
藤田保平　手島寅雄
吉見一郎　宮本平八郎

◇校医としての永年功労者
野呂英三

祝辞

創立四十周年記念を祝して各氏から学園長黒沢酉蔵先生の酪農教育に心血を注がれた偉大な業績を称え、学園の理想と使命の達成に期待する内容の御祝辞が述べられた。

北海道知事　堂垣内尚弘殿

三愛主義に基ずく人格の陶冶と安定農業の基盤である酪農教育に尽力される酪農学園に敬意を表して…と

私学並に関係団体代表
札幌経済高等学校理事長　足羽慶保殿

本道私学の先達的役割を果し農業後継者並に指導者の養成に偉大な成果をあげられた―と

キリスト教学校教育同盟校代表
北星学園理事長　時任正夫殿

汗と勤労と実習に裏打ちされたいわゆる実習教育による真の人造り教育をされた…と

農業関係団体代表
ホクレン農業協同組合連合会副会長　谷玉吉殿

学園を巣だった青年男女が北海道農業の開発の中心になっておられることに敬意を表して…と

雪印乳業株式会社社長　山本庸一殿

北海道を東洋のデンマークたらしめようと提唱して、酪農学園を創設された黒沢先生に深く敬意を表して…と

酪農学園後援会副会長
クレドール興農株式会社社長　三井武光殿

祝宴にはいって、次の両氏から学園四十年の歴史の流れに、ユーモアをまじえてのお話しがあり、宴席は一段と和んで祝杯が重ねられた。

元酪農学園副理事長
北海タイムス社長　川村秀雄殿

祝電

文部大臣奥野誠亮殿他八七名の方より祝電をいただき、衷心より感謝いたすと共に一層の奮起を誓うものである。

酪農学園後援会の会長をおひきうけしたのは、昭和四十四年の八月であるから、四年たったことになる。いま、学園は創立四十周年を迎えた。したがって丁度、学園の歴史に十分の一を、いわば応援団長として、一生懸命旗をふってきたことになる。

過去の四十年は、その前の百年以上の変化を経験している。最近の四年間の変化には、さらに著しいものがある。

特に最近は、実にいろいろな問題がでてきている。環境、都市、資源、食糧、スタグフレーション、価値観、老人、教育、その他、複雑で相互にからみ合った問題が続々と表面化してきている。

我々人類の未来を、より長い目で見ても、地球上の資源の量には限りがあり、人口はますます増加し、食糧増産にも限界がある。工業化をすすめていけば、汚染の問題がでてくる。

マクナマラ世銀総裁によれば、インド大陸では、実に二億人が年間平均四十ドル以下の所得で生活しているという。

いま西アフリカでは、旱魃のため六百万人の人たちが餓死寸前にあるという。

しかし我々は悲観することはない。世界中に、営々と額に汗している人たちがいるかぎり、あらゆる困難を切り開くに相違ない。

去る九月、中国国際貿易促進委員会の招きで、訪中経済使節団を編成し、経済界の諸君と一緒に中国を訪問してきた。一日、上海郊外の華荘人民公社を訪れた。この人民公社は、いまから二十年前に設立され、現在は、八の生産大隊、七七の生産隊からなり、三、五四〇世帯に一四、五八〇人が住み、一、二一二ヘクタールの耕地を有している。

文化大革命以後十一年間、連続して好収穫が続いているという。穀物は一九七二年一ヘクタール当り一〇、三四二キロで、一九五七年比八六%増、繰綿は一九七二年一ヘクタール当り一、七五五キロで、一九五七年比一四〇%増、養豚は一九七二年二〇、一六六頭、養鶏は一九七二にわとりとあひる合計で七万羽。漁業は一九七二年の淡水魚の漁獲量四八、五〇〇キロであったという。

人民公社直営の工場では、現在、農器具、農薬の生産、副産品の加工が行なわれている。工場は当初、農器具、脱穀機、ポンプ、モーター、ディーゼル・エンジンの生産を行なうまでに至っている。

現在、大型トラクター十八台を含めトラクター九二台あり、機械化耕地は全農地の九五%に達しているという。農地の九〇%は、電力灌漑である。一九七二年末の所得は、各世帯平均の年所得が七九四元で、一九五七年比二・一倍となっている。

教育施設は十ヵ所あり、三、〇三〇名の学生がいる。健康管理については、衛生院に三八名が勤務し、各生産大隊に衛生室があり、はだしの医者（社員であり医者）が二八名いる。

さらに、八七の生産隊毎に衛生員がおり、普通の病気は殆んどこの人民公社で治療されるとのことである。また、保険制度も整備されており、合作医療制が一九六七年から始められている。本制度に加入すると一年間一元五〇銭で一年中治療が受けられるという。

今回の中国訪問でとくに印象を受けたのは、大衆の顔付きがきわめて明るく晴やかであったことである。

こうしてお隣りの中国では、皆が一生懸命働いている。しかも、国内の経済建設を第一の課題としており、その場合農業を基本として、工業はいわゆる導き手として、農業開発の基本を進めながら、必要に応じて、適切に推進していくという姿勢をとっている。

農業と酪農は、いわば国の礎である。これは、日本も中国もかわらない。しかしこの二つは、学理の裏づけをもった経営の実習がもっとも大切な世界である。特にわが国の場合、その生産性の向上が緊急に必要とされている。そして人生において、もっとも尊いものは、額に汗することである。

こうしたことを考えるとき、私は、将来、農家経営の柱となる子弟を中心に、実学を旨とする酪農学園を創始された黒沢酉蔵先生の卓見に心からの敬意を捧げるものであり、この学園を担う役割がきわめて大であることが今さらの様に痛感される。

そして、賀川豊彦先生の酪農讃歌「黒土よ　みどりなす草身につけて　地上をかざる日のもとに　牛追う若人はぐくめよ」に数多くの人が共感をおぼえるものと信ずる。

酪農学園創立四十周年に際し、これからの四十年がさらに幸多き年々であることを祈ってやまない。

酪農学園の四十周年を迎えて

酪農学園後援会会長　植村甲午郎

就任ごあいさつ

酪農学園大学
短期大学学長
遊佐孝五

このたび酪農学園大学、同短期大学の学長に任命されましたが、その任務と責任の重大さを痛感している次第でございます。

時あたかも酪農学園創立四十周年を迎え、本学園はこれを契機に四十年の歩みを踏みしめ、創立の精神を再確認しつつ決意を新たにして、日本酪農発展のためにさらに努力前進しなければなりません。

この歴史ある酪農学園の大学短大学長として浅学非才ではありますが、建学の精神の具現と価値ある酪農学園大学、短大の永続的発展のため努力する決意でございます。

私は建学者黒沢園長先生の御薫陶を受けて二十数年になりますが、酪農学園が酪農による日本農業の改善発展と、農民教育人間教育の必要性から設立され、日本国民の心身共々の健康を達成するために存立するという意味において、本学園の使命と意義を確信している者の一人でございます。特に人口激増による世界的食糧不足の問題や、我国食糧の安定確保あるいは食糧自給率の向上等重要な課題に直面している現在、本学園の使命はますます重大であるといわざるを得ません。

酪農学園大学、短大も、短大開学から二十四年、大学から十三年の年輪を数え、両校の卒業生は四、六〇〇人を超えるに至り、全国各地において前述の学園使命達成のため努力しております。

さて本学が大学本来の使命である真理を探究し、学問の研究・教育を遂行することは申すに及びませんが、私立大学として本学独自の建学の精神に基づいてこの使命を達成しなければなりません。すなわち三愛精神による人間教育を、酪農科学の研究、教育を通じて日本農業の改善発展に貢献せんとするものであります。しかも私学として独自の建学の精神と確固たる理念を持つばかりでなく、その確かな実践がなければ永続的発展は望めません。

その意味におきまして本大学短大の現状をじっくり見廻しましたときに、研究・教育を遂行し本学の使命を達成するための研究・教育諸体制、諸施設等々に改善充実してゆかなければならない点の多いことを認識せざるを得ません。さらに私学をとりまく外的環境もきびしく、例えば私学への国庫助成や国公私立大学間の研究・教育体制の格差の問題、あるいは本学のような農科系大学として農業経営者減少の問題等々多くの困難な課題があります。しかし、これら多くの不充分な点、困難な課題に対し徒らに批評批判ばかりしていては前進できません。私共大学人で実行可能な問題については積極的に取組み、一つ一つを実践しその積み上げによって改善解決してゆく決意が今こそ必要でありましょう。私もそのために信念と勇気をもって、大学、短大の全職員、学生と共に一歩一歩着実に前進する決意でございます。

また、私共だけでは解決できない問題につきましては、酪農学園の同窓生はじめ、本学園の存立意義を理解される方々の御支援を得て実現してゆきたいものと願っております。

教職員各位はもとより、本学園の同窓生各位、そして本学園にかかわる総ての方々の一層の御指導、御鞭撻、御協力をお願い申し上げます。

酪農学園同窓会会則

酪農学園同窓会々則については本紙第十一号に掲載して卒業生諸氏にお知らせしたところであるが、その後理事会、評議員会及び事務局各規定が決定したので左記によりお知らせいたします。

理事会規定

〈第一条〉本会の構成は会長、副会長、理事とする。

〈第二条〉理事会は会長が必要と認めたとき及理事五名以上の請求があったとき招集され会長がその議長となる。但し会長欠席の時はその限りでない。

〈第三条〉理事会は八名以上の出席者がなければ開くことができない。

〈第四条〉理事会の開催日時及場所は期日より十四日前に書面で通知しなければならない。但し緊急を要する場合はその限りでない。

〈第五条〉理事会の議事は出席者の過半数を以て決し、可否同数のときは、議長がいずれかに決する。

〈第六条〉次の事項は理事会において審議議決する。①毎年度の予算案および決算に関する事項。②資産の管理および処理に関する事項。③評議員会に提案しようとする事項。④本会々則第五条に掲げる事項。

〈第七条〉この規定の改訂又は追補は理事会の承認を得て役員会において行なう。

評議員会規定

〈第一条〉評議員会は会長が必要と認めたとき及評議員の三分の一以上の請求のあったときに招集される。

〈第二条〉評議員会の議長は出席の評議員の中からその都度互選する。

〈第三条〉評議員会は評議員の過半数の出席がなければ開くことが出来ない。評議員会の開催日時及び場所は、期日より二週間前に書面で通知しなければならない。但し緊急を要する場合はこの限りでない。委任状も出席と認める。

〈第四条〉評議員会の議事は出席者の過半数をもって決し、可否同数の時は議長が何れかに決する。但し本会の特殊性を考慮し書面による表決によることができる。

〈第五条〉次の事項は評議会の議決を経た後でなければ決定又は実施することはできない。

1 会長の任免ならびに役員の選任
2 予算の決定と決算の承認
3 資産の処分
4 本会の会則及細則の変更
5 解散

事務局規定

〈第1条〉本会会則第十二条の規定に基づき、本会の事務を処理するため本規定により運営する。

〈第2条〉事務局に次の職員をおく。

事務局長　1
職　員　若干名

〈第3条〉事務局長は会長の命を受けて事務を統轄する。必要ある場合事務局長は臨時職員をおくことができる。

〈第4条〉職員の任免は会長が行なう。

〈第5条〉事務局の事務は事務局長の決裁を経てこれを処理する。

但し重要事項は理事会の議決を経ることを要する。

〈第6条〉事務局は次の事務を行なう。

1 役員会、理事会、評議員会、監事会に関する事項
2 本会の広報調査連絡に関する事項
3 支部に関する事項
4 公印の保管管理に関する事項
5 文書の収受発送並保管に関する事項
6 職員の給与福利厚生および役職員の出張に関する事項
7 金銭物品の出納および資産の管理に関する事項
8 予算決算理由に関する事項
9 その他本会の運営に必要な一切の事項

〈第7条〉公印の種類は、会長印、事務局長印、領収印とする。

〈第8条〉㈠ 文書の取扱は次の簿冊により整理保管するものとする。

1 各種文書綴（種類毎に別冊とする）
2 文書発刊簿及び受付簿
3 その他必要と認められた簿冊

㈡ 文書の保管期間は別に定めるものを除き次のものを永久保存とし、その他については重要度に応じて保存年数を定めるものとする。

1 本会々則諸規定、各年度の予算決算、事業計画及び事業書類の原本
2 役員会、理事会、評議員会等に関する議事録
3 役員の進退書類
4 その他特に必要と認められる文書

尚本会事務局所在地左の通り

記

北海道江別市西野幌五八二
酪農学園同窓会連合会
事務局
郵便番号〇六九―〇一
電話　〇一一三八
⑥―一一一一
内線　三九九

感　謝

本会発会を記念して大阪府豊中市の河野実義殿より本会基金として金五万円の御寄付がありました。

■人事発令■

四七年度分

△大　学
昇格（四七・一〇・一）
主事補（書　記）服部智恵子
〃（〃）増本　淑子
〃（〃）鎌田みどり
〃（〃）小林　公子
（四八・一・一）
〃（書　記）広島　厚子
新任（四七・一二・一）
〃（〃）沢田　憲宏
主事補（書　記）島津　千栄
〃（〃）山重　道代
書　記（事務補）森　美和子
技　師（技師補）伊藤　誠征
新任（四・一）
教　授（嘱　託）斎藤　兵市
助　手　高橋　裕
〃　山本　克博
主事補　若松不二子
〃　中村貴美恵
書　記　網島　彰男
事務補　木村恵利子
技　手　市村　保
技師補（六・一六）岡田　秀雄
嘱　託（六・一六）北上　富三
書　記（七・一）木次　範子
〃（八・一）佐藤　栄子
学長の任命（七・六）
酪農学園大学、同短期大学学長に任ずる
教授　遊佐　孝五
学長事務取扱の解任（七・六）
学長事務取扱を解く
教授　久米小十郎
兼任（七・二〇）
事業部兼務を解き植苗農場長を解く
教授　久米小十郎
休職
主事補（五・一七）木村　宣治
退職
技　手（五・三一）市村　保
主事補（六・三〇）増本　淑子
〃（七・三一）中川　明子
副　手（九・一七）橋詰喜代子
助　手（九・二九）高橋　茂
死亡
嘱　託（四・一九）志摩　耕作
教　授（七・一〇）田垣　住雄
△短期大学
昇格（四・一）
教　授（助教授）杉田　文雄
新任
講　師（四・一）後藤　弘
書　記（〃）高橋由利子
〃（〃）堀川　玲子
技　手（〃）黄田　満
兼　任（九・一）
事務長事務取扱　教授　杉田文雄
退職（八・三一）
嘱託・事務長事務取扱
島田　誠吉
△機農高校
昇格（四・一）
主事補（書　記）高井　洋子
職名変更（五・一）
川村　武夫
退職（四七・一二・三一）
主事補　加藤ツヤ子
（四八・三・三一）
助教授　渡部　光男
助　手　島田　昌子
主事補　加藤久美子
〃　小林　公子
書　記　川端よし子
学長事務取扱の解任
（四八・三・三一）
学長事務取扱を解く
教授　牛島　純一
兼任（四八・三・三一）
三愛女子高校兼務を解く
宗教主任　山畑　勝美
△短期大学
転任（四七・一一・一）
事務局へ　事務嘱託　横地　意吾
学長事務取扱の解任
（四八・三・三一）
学長事務取扱を解く
教授　土橋　慶吉
退職
助教授　外山　敏雄
助　手　中本　教一
主事補　植田　道子
△機農高校
新任（四七・一一・一）
嘱託（夜警員）　若瀬　政芳
△三愛女子高校
昇格（四七・一〇・一）
主事補（書　記）横地　康子
休職（四七・一〇・一）
教　諭　大鋸ひろ子
△事業部
退職（四八・三・三一）
技師補　勝部　信二
△事務局
昇格（四八・一・一）
主事補（書　記）南　裕子
退職（四八・三・三一）
主事補　赤坂喜恵子

四八年度

△大　学
学長事務取扱の任命
（四・一）
学長事務取扱を命ずる
教授　久米小十郎
昇格（四・一）
教　授（助教授）西埜　進
〃（〃）渡辺　基
講　師（助　手）岡田　雅昭
技　師（技師補）折尾　広一
（七・一）
事（主事補）加藤　正勝
校務補
退職（四七・一二・三一）
主事補　加藤ツヤ子
（四八・三・三一）
助教授　渡部　光男
助　手　島田　昌子
主事補　加藤久美子
〃　小林　公子
書　記　川端よし子
学長事務取扱の解任
（四八・三・三一）
学長事務取扱を解く
教授　牛島　純一
兼任（四八・三・三一）
三愛女子高校兼務を解く
宗教主任　山畑　勝美
△短期大学
転任（四七・一一・一）
事務局へ　事務嘱託　横地　意吾
学長事務取扱の解任
（四八・三・三一）
学長事務取扱を解く
教授　土橋　慶吉
退職
助教授　外山　敏雄
助　手　中本　教一
主事補　植田　道子
△機農高校
新任（四七・一一・一）
嘱託（夜警員）　若瀬　政芳
△三愛女子高校
昇格（四七・一〇・一）
主事補（書　記）横地　康子
休職（四七・一〇・一）
教　諭　大鋸ひろ子
△事業部
退職（四八・三・三一）
技師補　勝部　信二
△事務局
昇格（四八・一・一）
主事補（書　記）南　裕子
退職（四八・三・三一）
主事補　赤坂喜恵子
△事務局
昇格（四・一）
主事補（書　記）
新任
事務補（四・一）砂川千代子
〃（七・一）堀田　玲子
転任（九・一五）
（短期大学）
退職
主事補（六・三〇）加藤　智子
宗教主任（教諭）清水　寛
△三愛女子高校
新任
教　諭（四・一）橋向　啓子
助教諭（四・一）雨宮　恵二
嘱託夜警員（七・一）陶器嘉一
嘱託炊事員（四・一）村上カヨノ
職名変更（五・一）
宗教主任（助教諭）雨宮　恵二
退職
助教諭（七・一〇）引地　麗子
教　諭（七・三一）大鋸ひろ子
△酪農学校
昇格（四・一）
主　事（主事補）天井富士雄
（七・一）
主事補（書　記）道下　幸子
退職（七・一五）
主事補　道下　幸子
新任
事務補（一〇・一）桜沢久美子
△自動車学校
新任
助教諭（四・一）的場　豊継
△事業部
新任
技師補（四・一）松浦　善治
〃（一〇・一）原田　房信
兼任（七・二〇）
植苗農場長事務取扱を命ずる
事業部長　西本　宗信

編集後記

四十周年を迎えた学園は十月一日、厳粛且つ盛大に記念式典が行なわれたことは、大きな喜びである。この行事を契機に過去を顧みて、今日に発展した学園を寿くと共に次への発展をどうすべきかを考える「思索と躍進」のステップにしたいものと思う。

（かつめ）